

環境負荷の少ないガーデン普及のための基礎研究(3)

丸山 美夏(園芸準備室)

来島 泰史(園芸準備室)

菊地 牧恵(園芸準備室)

澤登 早苗(人間社会学部人間環境学科)

Basic Research on Gardens with Reduced Environmental Impact

MARUYAMA Mika, KIJIMA Yasushi, KIKUCHI Makie,
SAWANOBORI Sanae

Abstract

With the aim of developing techniques for creating low-maintenance, eco-friendly garden spaces, we have been studying the use of perennial plants. Drawing upon our previous experiments, a guiding objective remains the creation of gardens which reflect the four seasons of Japan. Perennials are favored because they can endure the course of several years, and require less maintenance per year. However, managing perennials involves unique challenges. Each type of plants has specific characteristics, and requires specific, concrete knowledge for its proper use. The following report explores these issues, and proposes a concrete method for resolving them.

1. はじめに

前年度までの調査で、宿根草を活かす庭作りにおいては、「農薬を使わない多年草の庭」「日本の四季を感じる庭」「人と環境のための庭作り」が可能であることが分かった。そしてそのためには、従来の一年草主体の花壇から、宿根草を主体とした花壇への転換が有効であることが、明らかになった。

しかし宿根草主体の花壇では、それぞれの宿根草の特性や特徴を知り、適期的に的確な手入れをする必要があり、良い状態を保つためには相応の知識と経験が必要である。また、そのような花壇作りを実践するためには、宿根草の種類別の扱い方や、その後の管理について、またそれらをどこから入手するかなど、いくつかの具体的な課題がある。

前年度までの調査結果をまとめるべき本年(2012年)度は、宿根草を主体とするガーデンを環境負荷の少ない庭作りとして提案・普及していくため、上述した課題や問題点にどう対処するのかを念頭に、大学で公開講座を開催し、その結果をアンケートを通して分析した。また大学や多摩市立グリーンライブセンター(以下TGLCと略す)に於いて、園芸講座やワークショップを開催し、コミュニティ・ガーデンの交流を通じた情報交換の場をどのように設けたらよいかなど、具体的な手法についても検討した。

2. 園芸講座「宿根草を活かした庭作りのすすめ」の開催と参加者へのアンケート結果

1) 講座概要

2012年11月23日社会園芸学科開設記念講座として「宿根草を活かした庭作りのすすめ—身近な場所に自然を作りましょう!」と題した、申し込み不要の無料のイベントを開催した。

特別講師には、昨年宿根草の視察に訪問した宿根草農家の長森正雄氏(千葉県富里市)を招いた。講座では、ナーセリーに併設された試作ボーダーのスライドを上映し、さまざまな宿根草を紹介しながら使い方に留意した解説が行なわれた。またキャンパスで花壇管理を行っている大学スタッフによるガーデンツアーと、同氏のナーセリー「エフメールながもり」で育苗、生産された宿根草の花苗の販売会を行った。

講座の広報は、大学キャンパスとTGLCにポスターを掲示したり、恵泉祭でちらしを配布した。冷たい雨が降る悪天候にも関わらず、100名程の参加があった。参加者の多さに、宿根草を活かした花壇作りへの関心の高さを実感できた。もちろん申し込み不要、参加費無料ということで気軽に参加でき

る講座であったことも参加者数が増えた一因であろう。

雨天のため、ガーデンツアーは通常よりも短いショートコースとした。心配された花苗の販売についても、販売会場はバーゲンセールのような賑わいだった。参加者数に対し対応にあたるスタッフが少なく、十分な対応が出来ない面もあったが、イベントは大盛況であった。



写真1 講座の様子



写真2 ガーデンツアー

2)参加者へのアンケート調査の内容と結果

研究助成を受けて無償で開催している講座であることを説明し、参加者にはアンケートに協力していただいた。以下にその結果を示す。(参加者100名 アンケート回答率80%)

(1)参加者の概要

年代： 20代・30代 14% 40代・50代 30% 60代以上 51% 無回答5%

性別： 男 80% 女 14% 無回答6%

住まい： 多摩市内32% 町田市・八王子市近郊 13% その他 54% 無回答1%

(2) 参加者のうちガーデニングを行っている人の割合は全体の87%と高く、ガーデニングの場所については、自宅だけでなく、半数近くの人が、公共の場所でも活動している(表1、表2)。

(3) 約半数の人がガーデニングを趣味としており、それに加えて、友だち作りや健康のためにやっている人もいた(表3)。

(4) 化学肥料や殺虫・殺菌剤の使用の有無については52%が使用していた(表4)。

使用しているものとしては、園芸店やホームセンターで入手しやすく、扱いやすい粒状の殺虫剤や化学肥料、液体肥料の名前が上げられた。

(5) 有機で庭作りを実践している人が46%、実践したい人が52%であった(表5)。実践したい人が、前問で、化学肥料や農薬を使っている人と同数であることから、ほぼ全員が、有機による花壇管理の実践を希望していると推察される(表6)。

(6) コンポストについては、実践している人が56%、実践したい人が21%で、使用しているコンポスト材料は、生ゴミのみ23%、落葉のみ27%、混合が33%であった(表7)(表8)。

3) アンケート結果から明らかになったこと

(1) ガーデニングの目的の多様化

ガーデニングに関心のある参加者の中には、自宅以外にも公共スペースでガーデニングをしている人が多かった。このような参加者の割合が多かったのは、本講座への参加の呼びかけを、TGLCでのポスター展示を通して、また市民ボランティアや多摩市のコミュニティ・ガーデンのグループに対して、直接行ったためであると思われる。

また、ガーデニングの目的を複数とする回答が多かったことから、ガーデニングを趣味とする参加者は、ガーデニングを楽しむことのなかに、健康や友だち作りなどの意義を見いだしていることが推察される。コミュニティ・ガーデンに携わる人の割合が高いことによる影響も考えられるが、ガーデニングの目的は、花を楽しむだけの個人的な趣味にとどまらず、園芸を通して何かを獲得するために行うもの、つまり、より広がりを持ったものに変ってきていると考えられる。

(2) 有機栽培による花壇作り

草花でも有機栽培の実践を希望している人が多く、またコンポストへの関心も高かったことから、大学が開催する講座に参加する受講生の、自然環境に対する意識が高いことを実感した。このようなニーズが高いことを考えると、大学キャンパスの花壇管理においても自然環境に配慮した園芸技術を向上させてゆくべき時を迎えていると思われる。

しかしその一方で、現段階では化学肥料や殺虫・殺菌剤を使用している人の割合が約半数あることから、庭作りにおいても無農薬・無化学肥料が可能であることをアピールすると同時に、それを成功させる上で鍵となる宿根草を中心とした庭作りについても、引き続き研究していく必要があることが明らかになった。

また有機園芸の基本は土作りである。暮らしの中で発生する生ゴミや身近にある落葉を利用し、コンポストを作り、花壇に還元することは、地域資源の有効活用と循環の「見える化」につながる。本学には、オーガニックカフェで出た生ゴミでコンポストを作り、それを畑に返し、そこで収穫した野菜をカフェで使用するという資源「循環」に関するわかりやすい事例がある。循環型システムを畑だけでなく花壇においても実現できるよう、取り組みやすいコンポストの導入について研究する必要性を感じている。

表1

質問1	選択肢	人数	割合
あなたはガーデニングを行っていますか？	①行っている	70名	87%
	②行いたい	5名	6%
	③行っていた	3名	4%
	未回答	2名	3%

表2

質問2	選択肢	人数	割合
どこでガーデニングを行っていますか？	①自宅	36名	45%
	②公共の場所	6名	7%
	③その他	5名	6%
	④自宅+それ以外複数	29名	37%
	未回答	4名	5%

表3

質問3	選択肢	人数	割合
あなたにとってガーデニングとは？	①趣味	42名	52%
	②健康のため	3名	4%
	③友達作り	2名	3%
	④その他	5名	6%
	⑤趣味+複数	25名	33%
	未回答	2名	2%

表4

質問4	選択肢	人数	割合
化成肥料(液肥等)、殺虫殺菌剤を使用していますか？	①はい	42名	52%
	②いいえ	35名	44%
	未回答	3名	4%

表5

質問5	選択肢	人数	割合
化学肥料や農薬を使わずに花を育てることに関心がありますか？	①はい(実践している)	35名	44%
	②はい(実践したい)	42名	52%
	③いいえ	2名	3%
	未回答	1名	1%

表6

質問6	選択肢	人数	割合
コンポストに関心がありますか？	①はい(実践している)	45名	56%
	②はい(実践したい)	17名	21%
	③いいえ	14名	18%
	未回答	4名	5%

表7

質問7	選択肢	人数	割合
実践している方は、何をコンポストの材料にしていますか？	①生ごみ	12名	23%
	②落ち葉	14名	27%
	③生ごみ&落ち葉など混合	17名	33%
	未回答	9名	17%

(3) アンケートの自由記述

主なコメントは、「生産者による説明が良かった」「スライドが多く分かりやすかった」「参加して良かった」「勉強になった」「楽しかった」「もっと聞きたかった」「またやって欲しい」など、好意的なものが多くそれらが95%以上を占めた。

一方次のようなコメントについては、本講座があくまでも入門的な内容を扱っている講座であることをもう少し丁寧に説明し、栽培や管理など実践的な内容を習得する講座には「タネから育てる花壇作り」(講師：山浩美)などがあることを示す必要があったと考える。

「管理のポイント、手入れの仕方などの説明が欲しかった」「育苗についても知りたかった」

「最盛期だけでなく、四季の移り変わる様子も紹介して欲しかった」「もう少し聞きたかった」。

その他のコメントとして、次のようなものがあった。

- ・ 今までは一年草中心だったが、宿根草の素晴らしさを写真と説明で、とても興味深く拝見拝聴できた。
- ・ 環境に優しい自然なお庭を紹介して頂き、興味深かった。
- ・ 大変分かりやすく素晴らしい講座だった。

3. クリスマスローズの生産者、横山ナーセリーを視察して

2013年3月15日、東京都綾瀬市でクリスマスローズを生産する横山ナーセリーを訪ね、お話をうかがった。以下にその概要を記す。

1) クリスマスローズの人気の理由

クリスマスローズは近年、全国各地でフェアが行われている。園芸番組や雑誌の特集に取り上げられることも多く人気の高い植物である。その理由として、毎春花を咲かせてくれる、丈夫で育てやすい、花が少ない時期に咲き開花期が長いことなどが挙げられる。

2) 横山ナーセリーについて

クリスマスローズの他、ダイヤモンドリリー、原種シクラメン、アネモネの生産と育種を、家族経営で手がけている。今回はご長男の横山直樹氏に話しを伺った。同氏は、クリスマスローズの育種で世界的に有名な英国アッシュウッド・ナーセリーや、RHS(英国王立園芸協会)で育種・生産・庭作りなどを幅広く学ばれ、現在、NHK「趣味の園芸」の講師を務めるほか執筆、講演活動などに活躍されている。

3) 原種へのこだわりと“プチドール”作出への想い

横山氏はクリスマスローズをより深く理解するために、毎年クリスマスローズが咲く頃、原産地を訪ねているそうである。できるだけ多くの原種に出会うことで、栽培のヒントを得るのだそう。原生地で咲くクリスマスローズをじっくり見つめることにより、五感をみがき、その豊かな感性を育種・品種改良に活かしているという。氏によればクリスマスローズもまた、日本の気候、風土に合う品種の育種を行うことにより、病虫害の被害を受けにくく管理が容易な有機栽培が可能になるそう。

“プチドール”は横山氏が構想13年、試行錯誤しながら9年をかけて作出した品種である。クリスマスローズは葉が大きく、花を隠してしまうため、なるべく葉の小さいものを選抜し、その後さらに根が適度に細いものを選抜し、小さな鉢でも育てられる、根詰まりしにくい品種に改良したという。“プ

チドール”は少ないスペースで楽しめるコンパクトな草姿に加え、花の美しさが際立つ特性を持っている。



写真3 温室の原種シクラメン



写真4 横山氏作出のプチドール

4. 公開講座「宿根草を活かした庭作りのすすめ」

秋の特別講座が好評だったことを受け、2013年度春期より「宿根草を活かした庭作りのすすめ」と題した公開講座（全3回）を開催することになった。以下に講座の目的と概要を示す。

講座の目的

①宿根草の魅力伝える。

宿根草には、季節が変わり花の時期が終わってもまた翌年に咲く楽しみがあり、四季の移り変わりや命のつながりを感じられる魅力がある。

②大学キャンパスの花壇を紹介し、そのコンセプトを伝える。

花壇管理者がキャンパス内にある様々な花壇や、パブリックガーデン（多摩センター駅前花壇）、多摩市グリーンライブセンターを紹介するガーデンツアーを行い、それぞれの花壇が場に応じたコンセプトをもって設計、管理されていることを説明する。

③関連の公開講座や草花検定への窓口とする。

本講座は、花壇作りの楽しみのほか、ガーデンを通して何が得られるか、どんな広がりや可能性があるかを伝えることを主としているため、プランニングや栽培などについては十分な知見を得ることは難しい。このことをふまえ、実践のためには他に講座を設けて受講することを推奨する。合わ

せて、2013年春から始まる草花検定を紹介し、受験生を増やすとともに知名度を高めていく。

④特別講師を招き、スタッフの研修の場とする。

春期は視察で伺った横山直樹氏を招き、「クリスマスローズの魅力」と題し、主に原産地へのこだわりと、原種から学ぶ育種や栽培方法について講義をお願いした。外部講師による講義は、園芸に関わるスタッフの貴重な研修の場ともなる。

表8 2013年度 春期公開講座 「宿根草を活かした庭作りのすすめ」

開催日	講師	講座内容	場所
4月27日	丸山美夏	春の花壇を歩こう	多摩キャンパス
6月1日	山 浩美	夏秋花壇に向く宿根草について	グリーンライブセンター
6月29日	横山直樹	クリスマスローズの魅力	多摩キャンパス

5. パブリックガーデンの展開

1) 落合地区におけるコミュニティ・ガーデン

落合団地及び、メゾン落合に於けるコミュニティ・ガーデン作りは、芝浦工業大の松下潤教授(代表)、本学の澤登らが共同研究で行っている「都市型農園を用いた高齢者の生きがい・就労の社会実験」からのコラボレーションの依頼を受けて始まったもので、そこでは、国土技術研究センターの助成を受けて社会実験が行われた。

2011～2012年度の2年にわたる社会実験からは、コミュニティ・ガーデンに関わることで、「健康づくりの意欲が高まった」「花壇を見に行くようになった」「友人が増え、挨拶をする人が増えた」などの効果が認められる調査結果が得られた。つまりこれからの高齢化社会において、コミュニティ・ガーデンを活用した生活が有意義であることが実証されたのである。

花壇管理においては、研究プロジェクト期間が終わった後も、落合団地、メゾン落合の両コミュニティ・ガーデンから、引き続き園芸指導の要請があり、今後も園芸教育課外活動の一環として、半期に1回(年2回)程度の頻度で花壇管理を行う予定である。

2)多摩センター駅前花壇

本学は多摩市の花壇管理のアダプト制度の第1号として、多摩センター駅前通りにおいて花壇管理を行ってきた。この既存の花壇に加え、2013年秋の国体開催にあたり、9月に新たに2区画、花壇の施工と植栽を行い、その後の管理をアダプト活動として受けることになった。

今後の管理は、ゼミ活動の一環として行う予定であるが、2013年4月に設置される社会園芸学科のカリキュラムの一部として組み込むことも検討中である。

6. 大学公式ホームページの関連ページ見直しと更新

大学ではホームページ開設当初から、キャンパスに点在する花壇の様子を紹介するページを設けて大学の広報にも広く利用してきている。しかし、その後ほとんど更新されていないことから内容の見直しを行った。具体的にはそれぞれの花壇についてコンセプトを明確に示し、新しく説明を加えると共に掲載されている写真を更新した。

またアダプト活動で大学が管理している多摩センター駅前花壇や、ハーブや野菜と草花を組み合わせたエディブル・コンテナガーデンの項目を新設した。

さらに学内においては、廊下を行き来する学生や来学者の目に留まることを期待して、ホームページ画面をプリントアウトしたものを園芸教育室前の掲示板に展示した。

7. おわりに

環境負荷の少ない、ローメンテナンス、ローコストの花壇作りを普及させるためのプロジェクト研究として今年度は、宿根草を主体とする花壇作りに関して、公開講座を開催し、地域のコミュニティガーデンでワークショップなどを行い、アンケート結果等を検討した。その結果、園芸を趣味とする人々の間に一年草主体ではなく宿根草を主体とする花壇に対する関心が高まりつつあることを確認した。しかしその一方で、宿根草主体の花壇作りにはより高いレベルの園芸全般の知識と経験が必要であり、大学は教育機関と

して、情報や交流の場の提供が期待されていること、また継続的な技術支援を行うためには、指導者を育成する必要がある、地域社会からの期待や要望に応えるためにはNPOを立ち上げるなどして、このようなニーズに対応可能な組織作りを検討していく必要があることが明らかになった。

現在米や野菜など、食べものには無農薬・減農薬を求める人が増えているが、鑑賞する草花やバラなどの栽培では殺虫剤散布に全く抵抗のない人が少なくないのが現状である。しかし一方で都市部では、公園の植栽の無農薬管理が広がりつつある。このような状況の中で多摩市、町田市エリアのパブリックガーデンやコミュニティガーデンにおいて、有機栽培による庭づくりを広めていくことは、地域の緑化活動や環境保全のために大学が担う重要な役割の一つであると考えられる。

このプロジェクトを通し、園芸が個人の楽しみにとどまらず、園芸活動を介して人と人がつながり、人がキャンパスに集い、大学と地域がつながり、より良い持続的な社会の構築に貢献できる可能性があること、それを進めるための課題が見えてきた。本学は、2013年度に新設される社会園芸学科、園芸教育室、南野オーガニックカフェなどを中心に、地域の交流センターとしてのTGLCとも連携をとりながら、地域の大学として中心的な役割を果たしていくことが、今求められていると考える。

参考文献

松下潤・米田隆志・澤登早苗(2013年)「都市型農業を用いた高齢者の『生きがい・就労』社会実験」、国土技術研究センター助成(受付番号11004号)

最終成果報告資料

恵泉女学園大学人間社会学部教授澤登早苗監修(2013年)『コミュニティ菜園の楽しみ方』(小冊子)

クリスマスローズ協会会報36号(2011年)